

連載：研究者になる！—第85回—

医学研究科・准教授 竹之内 沙弥香



●出逢いによって導かれ実現した夢

高校では、個を大切に、創造性豊かであることを重んじる「自主創造」の校風を、心ゆくまでエンジョイしたように思います。素晴らしい先生や友達に恵まれ、担任の勧めでチャレンジした生徒会、3歳から習っていたスイミングの延長で入った水泳部の活動や文化祭など、勉強そっこのけで青春を謳歌しました。あまりに高校生活をエンジョイし過ぎて、大学受験に危機感を感じ始めたものの時すでに遅し。幼い頃に流行ったアニメの主人公に憧れ、看護師になりたいと思いながらも家族の反対で文系コースに所属していた私は、1年浪人するなかで、やはり自分の夢である看護師への道を目指すことを覚悟し、理系に転向しました。

京大医療短大、米国留学や大学院を合わせると、長く多彩な学生時代を過ごしました。医療短大時代には、最終学年になっても就職活動をしていなかった私を心配して、担当の先生が面接し、ひそかに憧れていた米国のカリフォルニア州にあるホスピスへの留学を後押ししてくれました。その面接の帰り道、講義でそのホスピスを紹介してくれた先生にばったり出会ったこと、ゼミの指導教員であった恩師からも推奨を得たこと、両親が援助してくれたことで、留学の夢が現実になりました。米国の大学では、日本で学んだ看護や医療の知識を全部英語で学び直し、カリフォルニア州の看護師免許取得まで、ひたすら努力の日々でした。でもそこから得た、大切な人達との出会いや、念願のホスピスで看護師として働いた経験は、すべて私の宝物です。

●看護師の経験を活かして研究者に

米国のホスピス・緩和ケア病棟での仕事は、毎日新しい学びがあり、やりがいを強く感じていました。出来るものなら、このままずっとここで働きたいと思うほどでした。しかし、母国におけるナースの緩和ケア教育や倫理教育に、何か貢献できればと、5年間お世話になった San Diego の家族や仲間と別れを告げて、京大の大学院に進学しました。帰国後は、現場での看護に専念したいという気持ちが何度も頭をよぎりましたが、大学院で取り組んだ研究プロジェクトをやり遂げるために、研究者を目指しました。当時、アルバイト先の病院で、私が担当していた患者さんが、私の研究テーマについて、これからもっと大切になる領域だから頑張ってくださいと、幾度も励ましの言葉をくださったことも、研究者になる大きな後押しとなりました。

現在私は、病と共に生きる人とそのご家族に、看護師がどのような意思決定支援をすれば、患者の価値観を反映した医療・ケアを提供することができ、患者が満足して日々の療養生活を送ることができるか、より良い支援方法を検討し、多くの研究者と一緒にモデル開発に取り組んでいます。また、日本文化に即した倫理的看護実践と看護倫理教育を進めるために、国際研究や国内共同研究等を通して幅広い視点から考察を深めています。

●初心忘るべからず 叶えた夢をさらに大きく発展させるために

私生活では、看護研究者の立場から、妊娠・出産・育児の経験を経て多くの発見をしました。身体の生理的変化の不思議や生命の力強さ、Nursing（看護、授乳、育児）の素晴らしさを、実体験を通して学べる貴重な機会は、女性ならではのメリットだと感じました。

これまでに、子どもの怪我や病気で、急に仕事の予定を変更しなければならないことが何度もありましたが、それでも研究と子育てを両立できたのは、どんな時もあたたかく支えてくれた上司や同僚のおかげと深く感謝しています。大学時代からの付き合いの夫とは忙しいながらも、コミュニケーションを大切に、家事・育児を分担しています。夫が私の価値観をよく理解してくれているから、仕事と子育ての双方を頑張れるのだと感じます。子どもの小さい頃は、困難な課題に直面しては試行錯誤する日々でしたが、大学の支援や周囲の協力のおかげでここまでやってこれたことは、本当に有難いことです。

子どもが少し大きくなった今は、成長をそばで見守りながらも、「初心忘るべからず」をモットーに、より一層教育や臨床研究に真摯に取り組んでいきたいと思っています。質の高い看護ケアを実践できる看護師の育成や、患者さんの well-being の向上につながる研究を実施できる看護研究者の育成に尽力すると同時に、多くの医師や看護師に役に立ち、患者さんやご家族に喜んでもらえるような研究成果を、一つでも多く発表したいです。